

<今日の説教のポイント I コリント 14 章 20-25 節>

1 (おさらい) 異言と預言の違い 他者のことを考えているか。

パウロは 14 章に入って異言と預言について述べて来ました。異言は霊に導かれて恍惚状態の中で理解できない言葉で語り出すことであり、預言は神様から示されたことを理解できる言葉で語ることでした。異言の方が特別で信仰的なように思われるかもしれませんが、パウロは異言は自分を造り上げるに留まるが預言は教会を造り上げるので、預言の方がまさっていると指摘しました(4-5)。それは他者に対する愛という観点から神様の賜物を見ているからでした(1-3)。

2 (20) 「物事の判断は大人に」とはどういう意味？

パウロはどういう意味で、「物事の判断については子供となってはならない、大人になれ」と言っているのでしょうか？ 直前の 19 節で、「他の人たちをも教えるために、教会では異言で一萬の言葉を語るより、理性によって 5 つの言葉を語る方をとります」と言って、この言葉を語ったのです。不思議な姿(異言)を見せて信じさせるのではなく、福音(神様がイエス・キリストによって起こして下さった救いの出来事)を語り、この神様を信じていい理由をしっかりと理解してもらい、それが教会に託された伝道のあり方であるとパウロは言っているのです。だからこそ、今の私たちの礼拝も、牧師は聖書の御言葉の解き明かしに力を注いだ説教を行い、会衆も聖書の御言葉の解き明かしに熱心に耳を傾ける、それによって大きく憐れみ深い神様の赦しと支えを覚えて神様に感謝を捧げ、喜びと讚美の声を上げる礼拝を捧げているのです。

3 (21-25) 聖書の御言葉に真剣に耳を傾ける礼拝こそ、伝道の最前線。

パウロはこの後、異言ではなく預言を大事にする教会となるように訴えています。私は、受洗準備会で必ずお話しすることがあります。それは、信仰は、私たちがどれだけ熱心に信じるかより、信じる対象(神様)がどれだけ本当に信じるに足るお方であるかを探ることに力を注ぐことが大事だと。私たちが聖書を正しく深く読み取ることに力を尽くす時に聖霊なる神様は働いて下さり、この神様を信じる信仰に導いて下さるのです。そのようにして導かれた信仰者の集まった教会で正しい福音が伝えられる伝道がなされて行くことを神様は望んでおられるのです。